/特/集/
まえがき

科学と教育の結びつきを問い直す

小林大祐

かつて，第二次世界大戦による荒廃からの復興が目指されるなかで，国境を越えて広く効果を期待された方法があった．すなわち，わたしたちの先達は，二度と失われることのない平和と安全を実現するために，科学と教育を結びつけることが必要だと考えた．

たとえば，1945年に採択されたユネスコ憲章は，教育の平等を実現して客観的真理の自由な探究を保障することが人類の連帯を可能にし，人の心の中に平和のとりでを築くことになると謳った．大戦で多くの命を奪い失ったとき，そこには差別的教育によって人びとを幾重にも分断したうえで非科学的イデオロギーによって武力行使を美化する仕組みがあった．その仕組みを反転させる憲章の理念は，直近の経験に対する慙悔のエネルギーによって支持されていたと考えられる．民間の運動が先行してあって，日本政府がユネスコに加盟したのは1951年のことだった．

それから60年の記念すべき年に，わたしたちは福島第一原子力発電所事故を起こした．そして，また，深刻かつ大規模な放射能汚染による荒廃からの復興を目指している．取り返しのつかない仕方で失われたものを前にして，「軍事利用」と「平和利用」の違いが特別に重要な意味を持つようには見えない．幾種かの感情とともに，一つの疑問が頭をもたげる．大戦による荒廃からの「復興」とは，いったい何だったのか．科学と教育が結びつくことに対して，いまも何かを期待することができるだろうか．

政治的利害や経済的損益によって教育が左右されることの恐ろしさを知った先達は，教育を客観的真理の探究とこそ結びつけるべきだと考えた．このとき以来，教育との関係において科学は客観的真理の探究そのものとしてイメージされることがあったのかもしれない．しかし，現実には，教育だけではなくて科学もまた，その時々の社会における政治的利害や経済的損益によって左右されている．

科学と教育を結びつけることは，結果から見れば，むしろ，科学を媒体として政治的利害や経済的損益を教育に浸透させることだったのではないだろうか．本特集ではそのように問題を提起したうえで，科学と教育の結びつくところで覆い隠されてきたものを，いくつかの題材に即して明らかにしてみたい．

科学と教育を結びつけるというときには，二つの仕方がある．一つは，教育内容の中心に科学を位置づけること（科学の教育）である．三石論文と澤田論文は，日本の原子力・エネルギー教育を，その一例として取り上げて批判する．また，米山論文は，科学の教育に関して，時代に先駆けた福澤諭吉の提唱を紹介しつつ，そこに見られる制約を指摘する．

科学と教育の結びつきようのもう一つは，教育方法の開発や教育政策の立案を科学的に行うこと（教育の科学）である．田中論文と佐藤論文は，この面についての論考である．

本特集では，限られた紙数でも論点分散のリスクを恐れず，あえて両方面にアプローチした．

（**こばやし・だいすけ**：熊本大学，教育学）